書評

E. H. Carr (Tamara Deutscher ed.), *The Comintern and the Spanish Civil War* (The Macmillan Press, London 1984), xx 111p.

渡邊和行

一

本書は一九八二年一一月に鬼籍にはいった碩学、E・H・カーの遺作 posthumous work である。ソヴィエト史の泰斗として令名の高いE・H・カーの本書について、いまだ白面の書生たる評者がよくコメントしうる立場にはないが、スペイン内戦に関心をもつ一学徒として卒読した印象を記したい。

本書の内容にはいる前に、本書の成立事情について一言しよう。晩年のE・H・カーは、ソヴィエト・レジームのトータルな研究からソヴィエト・レジームの一側面の研究へと、研究対象の縮小と限定を強いられた。一九七八年にライフ・ワークたる A History of Soviet Russia の第一四巻 (Foundations of a Planned Economy 1926-1929, vol. 3, part 3.) を上梓して以降、著者は一九三〇年代のコミンテルンの研究へと関心を移したのである。その成果が、一九八二年に刊行された『コミンテルンの黄昏一九三〇—一九三五』(E. H. Carr, *The Twilight of Comintern 1930-1935*, The Macmillan Press, London 1982,

xi. 461p. 以下、前著と呼ぶ）である。前著はコミンテルンとソ連政府、コミンテルンと各国支部との間の相互作用を研究した大作であり、まさにE・H・カーの掉尾を飾るにふさわしい内容をもった著作であった。著者は前著の緒言のなかで、コミンテルンの研究へと進んだ理由を述べている(pp. vii-viii.)。第一に、著者が研究対象としてきた革命から生まれたレジームの主要な機構は、一九二九年までに樹立され、全一四巻をもって著者はほぼその研究をなし終えたこと、第二に現時点では、一九二九年を境に信頼しうる資料に接近しえなくなったこと、第三にソヴィエトの多様な側面を、従来のように一冊の書物に著わすことが困難になってきたことである。従ってE・H・カーは、スターリン体制が確立された一九二九年以降のソヴィエト・レジームの研究を断念し、資料も豊富なコミンテルンへと研究を進めたのであった。

E・H・カーは前著をコミンテルン第七回大会の召集で擱筆しており、本書はその続編にあたっている。著者は前著の緒言のなかで、続編を執筆する意欲を示していた。「スペイン内戦の劇的なエピソードとミュンヘン危機から、独ソ条約へと至る時期のコミンテルンの失墜eclipseと、大戦中のコミンテルンの最終的消滅を物語るもう一巻が心要とされるであろう」(p. viii.)と。このように、本書は元来、人民戦線戦術を公式に決議して以降のコミンテルン史の一章として構想されていたようである。しかし健康の衰えを自覚した著者は、研究の範囲を制限し、残された時間を『コミンテルンとスペイン内戦』の研究に精魂をこめて打ちこんだのである。なぜならこのテーマが、「より詳細な取り扱いに値するという認識」（T・ドイッチャー、本書、p. xvii.）を、著者はもったからである。不幸にも絶筆となった本書のこのような成立事情からして、著者の完成稿ではない本書を通常の書評のスタイルで取りあげることは、悖礼のそしりを免れないであろう。従って評者はこの点を考慮し、E・H・カーの遺作は何を解明し何を問題として残したのか、遺作からわれわれは何を学びうるのか、という以上のような観点から本書にアプローチしたい。というのも『ソヴィエト・ロシア史』を畢生のテーマとして研鑽を積んできた著者が、スペイン内戦に対するコミンテルンの政策やソ連の外交政策をいかに評価したのかを知ることは、この分野の研究の前進にとって不可欠であるからである。

本書の検討に進む前に、E・H・カーが前著で明らかにした二点について記しておきたい。なぜなら本書における著者の議論は、それらを前提としているからである。一つはコミンテルンとソ連国家との関係についてであり、他の一つは人民戦線の意味についてである（前著、p. viii, pp. 426-7.)。とくに創見が

あるというわけではないが、著者は前著の研究から次の結論を引きだした。この時期のコミンテルンは、ソ連という社稷の外交装置であり、[1] 人民戦線はファシズムとの闘争を優先させ、プロレタリア革命を中止させる戦術であった。コミンテルン第七回大会の時点では、レーニンの引用も頻繁で、いまだ革命性を保持しているかに見えたコミンテルンも、スペイン内戦の勃発とともに、明白にその行動をソ連の政策に従属させたのである。スペイン内戦は、第七回大会の真の意味を十全な姿で示したと言いうる。

以上のような位置づけのもと、E・H・カーはスペイン内戦期のコミンテルン研究に赴いたのであった。それでは次節で、著者の問題意識と方法を検討しよう。

二

評者がそもそも本書を繙いたのは、コミンテルンないしソヴィエトのスペイン内戦に対する態度決定の時期、武器援助や国際旅団のリクルートの方法などについて、新しい知見を得たかったことがその理由である。というのも評者は数年来、スペイン内戦とフランス社会についての研究を進めてきたが、[2] コミンテルン問題の晦冥の深さに嘆息することがたびたびあったのである。武器の調達や志願兵のリクルートの方法、フランス共産党PCF (Parti Communiste Français) 書記長トレーズのスターリンへの具申やアンドレ・マルティの行動など、[3] PCFの演じた役割について不明な点が多く、研究が暗礁にのりあげ停滞をよぎなくされたからである。如上の評者の問題関心は、残念ながら本書によっても十分には満たされなかった。それは評者の問題関心が、PCFを中心とした視野の狭いものであったのに対して、E・H・カーの問題関心は、共時的 synchronique にも通時的 diachronique にも、広範かつ遠大なパースペクティヴに支えられていることに起因していた。

それではE・H・カーの問題意識は、どこにあるのであろうか。標題がそれを指示している。標題は本書が内戦の戦争史ではなくて、あくまでも共産党＝コミンテルンを中心とした内戦の政治史であることを明示しているのである。著者はこのテーマの重要性を、結論部で語っている。著者によれば、「コミンテルン史におけるスペイン内戦の重要性は、統一戦線のドクトリンにとってとりわけ劇的な試験場を内戦が与えたこと」(p. 83.) にあるという。つまりスペインはドイツにとって新型の火器や航空機の試験場であったように、コミンテルンにとっても、統一戦線理論の実践場として位置づけられたのである。著者の考

えを評者なりに敷衍すれば、次のようになるであろう。一九三六年まで弱小で軽微な政党であったスペイン共産党PCE(Partido Comunista de España)が、なにゆえに内戦を通じて急速な政治的上昇を遂げたのか。その権力の征服と行使のメカニズムないしシステムは、何であったのか。その際のコミンテルンの指導は何であり、統一戦線の理論はいかに適用され、どう運用あるいは変形されたのか。著者はこのような問題群 problématique を設定し、それに自身で解答せんとしたのである。なぜなら第二次大戦前の共産党のなかで、PCEほど成功裏に国家装置を掌握した共産党はなかったからであり、このメカニズムこそ、第二次大戦後の東欧で実現されたものにほかならないからである。スペイン内戦期の教訓が、東欧の人民民主主義国の展開のなかでいかされていることについては、多言を要しないであろう。(4) E・H・カーが、コミンテルン第七回大会の研究よりスペイン内戦期のコミンテルン研究を重視する理由も、ソ連を後ろ楯とした弱小共産勢力による権力奪取と統治技術の方法における、スペインと東欧との歴史的アナロジーにあるのである。著者の基本的問題意識は、ここに存在したのである。

既述の問題にアプローチするために、著者は二つの方法をバランスよく織りなした。その方法とは、共時的分析と通時的分析である。換言すれば、構造的分析とプロセス的分析である。本書に即して言うなら、スペイン共和国政府内の権力構造の変化を経とし、コミンテルンおよびPCE内の議論や、西欧の諸政府および労働者政党の動向を緯として叙述する著者のスタイルに、その方法は表わされている。すなわち国内的要因と国際的要因の交差点上に、スペインの諸事件を置いて考察しているのである。われわれはコンパクトな分量のなかに、如上の見地からする著者の要領のよい整理を読むことができる。大家ならではの技量である。

以上、本書の成立事情や著者の問題意識と方法を述べてきたが、次節で本書の章ごとの内容を紹介し、終節で評者のコメントを加えることにしよう。

三

本書は、次の七章からなりたっている。

第一章　プレリュード

第二章　攻撃

第三章　不干渉委員会

第四章　防衛上の裂け目

第五章　外交の計算
第六章　「新しいタイプの民主主義」
第七章　敗北の味

第一章では、内戦前の左翼の状態が手際よく要約されている。コミンテルン第七回大会の決議をうけて、PCEは左翼勢力の統一にのりだした(一九三五年までのPCEについては、前著、pp. 289-318.)。強力なアナキスト勢力の存在が社共の接近を容易にするという状況はあったものの、人民ブロック＝人民戦線を志向するPCEは、急進化するスペイン社会主義労働者党PSOE (Partido Socialista Obrero Español) の左派＝カバリェロ派を宥和しつつ、人民戦線の結成にこぎつけたのである。二月の選挙勝利後も、PCEは穏健な人民戦線綱領に基づく左翼の統一を訴え続ける。なぜならPCEはこの時点での任務を、ブルジョア民主主義革命の成就と捉えていたからである。五月に開かれたコミンテルン執行委員会IKKIの幹部会も、この方針を承認した。なおこの会議で、共産主義者の政府参加問題についても議論され、参加はファシズムと反革命に対する闘争のなかで、人民戦線の利益に一致して決められると決議されたことは重要である。[5] ともあれPCEのアピールは、それぞれの革命を遂行せんとする他党のいれるところとならず、人民戦線派は亀裂を深めつつ内戦を迎えるのである。

第二章は、内戦勃発後のスペインの状況と国際的反応の叙述にあてられている。国内面では、民兵組織の編成が特記すべきことであり、国際面では、西欧の共産党が内戦を共和制度の防衛として位置づけたことが特筆すべきことである。このように内戦を人民戦線の枠内での闘いとして定義づけた背後には、仏英両国の外交政策と歩調をそろえることは重要であるという考えが、この当時のモスクワにあったからである。労働組合には義損金を集めさせてもソ連政府としては内戦に沈黙を保ったのも、[6] またフランス政府提案の不干渉協定を受諾したのもこのためである。不干渉政策については、特記すべきことはない。

第三章は三六年一二月頃までの、PCEをチャネルとしてソ連が政治介入を強める時期を対象としている。この時期は、ソ連の援助決定、マドリッドの攻防と国際旅団の登場、政府のバレンシア移転など、内戦の最初の山場をなす時期である。九月にPCEは二名の党員をカバリェロ政府に送り、愛国主義を強調し、民主共和国の防衛を最優先させ、そのための政策として単一の共和国軍の創設を主張した。IKKI書記局も同一線上の決議をあげていた。従ってコミンテルンではスペイン革命の性格についての議論は葬られ、「真の人民民主主義をもった特別な国家」とか「ブルジョアジーの真に左派的部分の参加をえた反ファシスト国家」とか「労農民主独裁の特殊形態」といった

曖昧な定義に終始し、理論面での深化はなされなかったのである。八月下旬の武官を含むソ連外交団の着任やソ連の援助決定は、ファシズムとの闘いを優先させる線にそってなされた。それのみならず国際旅団のなかに政治委員制度が導入されたことや、第五列を鎮圧するために秘密警察が設置されたことは、ソ連の抑圧装置のスペインへの扶植を意味した。これらの抑圧装置は、共産主義者が国家機構の征服を遂げていく踏み台となったのである。またPCEは、カタルーニャにおいてもアナキスト対策においても成功した。まずカタルーニャでは、PCEは社共の合同に成功し、カタルーニャ統一社会党PSUC（Partido Socialista Unificado de Cataluña）という新党を結成し、初めてここに橋頭堡を築いたのである。次に武器の流れを支配するPCEは、一一月にアナキストを入閣させ、一定程度、アナキストに枷をはめることに成功したのである。しかしPCEと他政党、スペイン人とソ連顧問との間の反目は消えなかった。

第四章は、PCEの優位が確立するネグリン政府の誕生までの三七年前半の時期を扱っている。カバリェロとPCEの軍事政策をめぐる角逐と、バルセロナ事件を契機としたマルクス主義統一労働者党POUM（Partido Obrero de Unificación Marxista）の弾圧[7]、カバリェロからネグリン（PSOE右派）への政権交替が軸になっている。カバリェロとPCEの対立は、首相が軍へのPCEの影響を排除せんとしたために生じた。カバリェロがPCEの影響力の強い人民委員会の再編を打ちだしたことがそのきっかけとなる。五月にバルセロナで勃発した「内戦のなかの内戦」によって、首相は窮地に立たされた。首相が共感をよせるPOUMおよびアナキストの労働組合たる労働全国連合CNT（Confederación Nacional del Trabajo）が、PSUCと中央政府に対して蜂起したからである。PCEは、これを奇貨として活用する。五月一五日の閣議で、POUMの非合法化などを要求するPCEに首相が抵抗したため、カバリェロへのPCEの支持は断たれた。翌日カバリェロは挂冠し、アナキストとPOUMを排除したネグリン内閣が誕生する。コミンテルンの意図は、ソ連に友好的ないし柔順な政治家を通じてスペインをコントロールすることであった。従って政府は、外見的には穏和な形態を保ち、内外に不安を惹き起こさないように配慮されたのである[8]。その一方でPOUMは無残にも粉砕され、夏には軍事調査局SIM（Servicio de Investigación Militar）の設置をみたのである。

第五章は、内戦史の転機となったネグリン内閣時の内外の状況にあてられている。革命的要素は削除され、戦争行為の効率のみが求められた。ネグリン内閣のもとで初めて軍が統一され、軍事最高会議も設けられた。SIMはスパイ活動に目を光らせ

る。PCEの優越のもと、政治的統一が達成されたのである。しかしその代償は、スペイン国内の革命的情熱の衰退であった。国際状況も依然として好転せず、第二インター、アムステルダム・インター、第三インターの間の話し合いも結実せず、実質のない共感アピールに終始した。西欧世界同様、モスクワでもスペインへの関心の明白な減退が観察されたことは重要である。

第六章はトリアッティ（IKKI幹部会員）のモスクワへの秘密報告[9]に依拠して、三七年後半の内外の状況を描いている。PCEは反ファシズム闘争の第一段階が、「新しいタイプの民主主義」のためにあるべきだとして、革命の抑制に挺身した。またPCEは、六月のPSOEとの合同の試みや七月のアナキストとの共同行動協定の交渉などの連合政策を推進しもした。軍の統一もプリエト国防相のもと前進し、九月には国際旅団の人民軍への統合をなしとげる。しかし軍隊内でのPCEの力の増大を心よく思わないプリエトと、PCEとの溝は深まった。PCEはPSOE系の労働者総連合UGT (Union General de Trabajadores) にも影響力を強めるが、国内に敗北主義が生じるのを押しとどめえなかった。英仏両国の反応もスペイン共和派に希望を与えるものではなく、戦況の悪化は政府のバルセロナへの移転をよぎなくした。

終章は、三八年からマドリッド陥落までを扱い、最後に全体の結論がおかれている。四月に「敗北主義者」のプリエトを辞任させたPCEは、この内戦をファシストに対する民族独立と領土保全の闘いとして位置づけ、反ファッショ勢力を糾合するために、革命的要素を排した穏健な一三カ条の綱領を政府に公表させた。しかし戦況は悪化の一途をたどり、狂瀾を既倒に廻らすことはもはや不可能となった。PCEリーダーやソ連顧問の脱出が始まる。トリアッティも三九年三月一〇日、PCE中央委員会名であらゆる抵抗の中止を呼びかける文書を作成して逃走した。かくて内戦は終了し、スペイン問題は政治問題から難民問題へと性質を変えたのである。

最後に著者は、次の三点を指摘して結びとしている。第一にこの時期のコミンテルンは、ソ連外交に従属していたこと、第二にPCEが支配的役割を演じえたのは、コミンテルン代表の指導と行政の重要な部署についたソ連顧問の力によってであること、第三に共和派のソ連への依存は、イデオロギー的依存ではなくて食糧から軍事に至るまでの物的依存であったことである。[10]

四

前節で見たように、スペイン内戦は多くのエピソードを提供している。「自由の義勇兵」たる国際旅団の闘い、ゲルニカの悲劇、ロンドンの喜劇、バルセロナ事件、アナキストの入閣などがすぐに浮かぶであろう。しかしこれらの事件は文字通り挿話（エピソード）であって、歴史の本筋 main plot ではない。PCEのカバリェロ内閣への参加こそ、重要な事件であった。[11] この出来事によって、PCEは世界で初めて非共産政府に参加した共産党となったのみならず、ソ連が政治介入をとげるパイプ役ともなったからである。

ところでこのソ連の介入の経緯は、当時より大きな謎に包まれていた。今日でもこの状態は、基本的には変わっていない。なぜスターリンはスペインに介入したのか。介入決定の時期はいつか。直接干与し嚮導したのは誰か。コミンテルンとPCEの関係はどうであったのか。国際旅団のリクルートはいかになされたのか。これらの点についても細部に関しては、不明なことが多く推測の域をでないのである。「歴史は推測科学 conjectural science である」（アンリ・ピレンヌ）という言葉は、この場合とくにあてはまる。従ってスペイン内戦とコミンテルンないしソ連外交について、何事か語ろうと欲しても、資史料の圧倒的欠落の前で佇立せざるをえないのが実状であった。本書も当然ながら、このような制約のもとにある。E・H・カーはトリアッティの極秘報告を利用してはいるものの、前述の諸点についてすべてを解明しえてはいないからである。もっともこのことは、本書の価値を毀傷するものではない。

本書の価値は、何といっても共産党に分析視座を据えたことにある。ヒュー・トーマスはフランコの勝因の一つとして、共和国側の分裂抗争とフランコ側の政治的統一という理由をあげているが、[12] この人民戦線側の「権力の分立状態を統合へと推進させようとした」のは、PCEにほかならない。実際「政治的、軍事的指導の一元化」もPCEによって、「反対派を排除しつつ強力に進められた」のである。従って分裂から実力による統合のプロセスは、PCEを中心とした歴史叙述によって明らかにされるはずである。「人民戦線諸勢力の内部分裂」という「政治史的に最も重要なテーマ」を解くためにも、PCEが研究の中心に据えられねばならないのである。[13]

これまで内戦期のPCE研究の重要性が看過されがちであったのは、内戦前のPCEがトリヴィアルな政党であったことや、内戦期のPCEの行動がヴェールに包まれていることによる。確かに内戦前のスペインにおける代表的な政治勢力として通例

E.H. Carr (Tamara Deutscher ed.), *The Comintern and the Spanish Civil War* (The Macmillan Press, London 1984), xx 111p. (渡邊)

言及されるのは、カタルーニャの労働者とアンダルシアの農民に根をもつアナキズム anarquismo とナバーラに残存するカルロス党 carlismo である。[14] PCEに積極的に論及されるのは、一九三四年頃のことでしかない。スペインの青史のなかでは、共産主義よりアナキズムのほうが古く、共産主義はつねにアナキズムないし、アナルコ・サンディカリズムの「後衛」に位置していたからである。三六年の時点でPCEは、数千人の党員とコルテスにおいては一六議席（全体は四七〇議席）をもつにすぎなかった。[15] スタンリー・ペインも指摘するように、「もしスペインが一九三六年に正常な政治情勢下にある近代的西側諸国のようであったなら、この程度の規模の共産党では比較的重要性がなかった」のである。[16]

しかるに三六年二月から七月にかけて、スペインの政局はドラスティックに転換し、政治的見解の分極化と既成政党の無力化を経験していた。かかる政治状況が、堅固な規律と強固な組織をもち、強力な忠誠心を武器とするボルシェヴィキ政党に「離陸」の機会を与えたのである。[17] E・H・カーが明らかにしたように、内戦の開始とともにPCEは、コミンテルンの援助を梃子に人民戦線のなかで政治的影響力を強め、他の左翼勢力との政治闘争に勝ちぬいてゆく。三六年の秋から始まるソヴィエトの援助は、軍事上の情勢を変えたのみならず、PCEに有利なように政治的均衡をも覆したのである。[18] もっともPCEの共和政府内での勝利のときは、人民戦線のナショナリストに対する敗北のときでもあった。

このように共産党視角の内戦史研究が重要であるにもかかわらず、これまでスペイン内戦の研究が最も進んでいる英語圏でも、数冊の研究成果しかないという状態であった。[19] E・H・カーと問題意識を同じくする浩瀚なボロテンの研究書も、三七年五月までしか扱っていない。[20] 従って本書はその分量といい内容といい、この分野における研究の筌蹄の役を果たす文献となることであろう。

確かに本書は、従来のPCE観を大きく変える見解を打ちだしてはいないが、それでも本書は今日まで重要性は認められつつも正面きって論じられることが少なかったテーマを掲げ、多くの事実を明らかにした。臨場感あふれるトリアッティの脱出の経緯は、その典型であろう。[21] またわれわれが本書から学ぶべき点は、資料の厳格な取り扱いということである。著者は春秋の筆法をもって同時代の証言と向かいあった。クリヴィツキーやエルナンデスのメモワールの批判的検討、トリアッティ（PCE書記長やラ・パシオナリアの演説草稿まで用意し、PCEを指導した）[22] の報告の利用など、われわれが亀鑑とすべき点である。メモワールや自伝は、あくまでも執筆時点から解釈され

た過去であることを忘れてはならないのである。

われわれに残された問題も、依然として多い。コミンテルン西欧局やPCFの動向、国際旅団のリクルートの方法、IKKI内部の討議の様子、スターリンの粛清とスペイン内戦に対する戦術との関連、ミュンヘン協定以前と以後でのコミンテルンの対スペイン政策の変化の有無、トリアッティによって「民族の統一」と「新しい軍隊」として要約された「新しい型の民主主義」[23]の実態の究明、カバリェロ内閣の性格規定、PCFとPCEとの入閣問題をめぐる態度の相違の理由（つまり、ファシズムに対して民主主義を擁護することが課題であったフランスと、その民主主義を獲得することが課題であったスペインとの段階的差異に対するコミンテルンの評価の検討）などが今後の課題である。

最後に本書の意義を屢述して稿をとじよう。本書は共産党に焦点をあて、スペインに対するモスクワの態度が、「革命理性raison de la révolution」ではなくて「国家理性 raison d'état」によって規定されていることを（T・ドイッチャー、本書、p. xviii.）、コミンテルン関係の資料を通じて明らかにした。戦争に勝つために改革を延期し、勝利まで待つという政策がPCEの権力の大半を作り出したのであった。しかし「人民民主主義の先駆形態」[24]と党史が自讃する「新しい型の民主共和国」は、スペイン人民にとってプロクルステスのベッドでしかなかったのである。ともあれ、すでに「黄昏」のなかにあったコミンテルンは、スペイン内戦を通じて闇に包まれたのである。

(1) ボルケナウは、コミンテルンの演じた役割に応じて次の三つの時期に区分している。第一期は革命の道具としての時期であり、第二期はロシアの分派闘争の道具としての時期であり、最後にロシア外交政策の道具としての時期である。Franz Borkenau, *The Communist International*, 1939. 佐野・鈴木訳『世界共産党史』（合同出版、一九六八年）二八四頁。

(2) 拙稿「不干渉政策の決定過程――ブルム内閣とスペイン内戦――」『香川法学』第三巻第一号、第二号。「不干渉とフランス世論一九三六――左翼政治集団の意見の形状――」同誌、第四巻第一号。「続不干渉とフランス世論一九三六――右翼政治集団の意見の形状――」同誌、第四巻第二号。

(3) トレーズは三六年九月二一日にモスクワを訪問して、スターリンに国際旅団の考えを進言したといわれているし（Hugh Thomas, *The Spanish Civil War*, 3rd ed., London 1977, p. 452.）、マルティは国際旅団で「活躍」した。両者はともに、コミンテルン執行委員会幹部会員でもある。

(4) Stanley G. Payne, *The Spanish Revolution* (New York, 1970). 山内明訳『スペイン革命史』（平凡社、一九七四年）二六一～二頁。

(5) コミンテルン第七回大会は、入閣問題について次のように決議していた。「共産主義者が統一戦線政府に参加するかどうかは、それぞれの場合に、具体的な情勢に応じて決定される

であろう。」村田陽一編訳『コミンテルン資料集』第六巻一九三三～一九四三（大月書店、一九八三年）資料二〇、一七一頁。

(6) 内戦勃発直後のソ連労働者の反応は冷淡であった。三六年夏にソ連の石油工場を訪れたアンドレ・ジイドは、そこの壁新聞にスペイン内戦の記事がなかったことに驚きを表明している。ジイドは、プラウダの指導方針が公にされるまで、自己の意見をあかさないことにその理由を求めた。ジイド「ソヴェト紀行」小松清訳、『アンドレ・ジイド全集』第一二巻（新潮社、一九五〇年）所収、四七～八頁。

(7) 一九三七年四月二〇日頃、ＩＫＫＩの名で出された「メーデーへの呼びかけ」のなかで、トロツキストは「フランコ将軍の第五列の仮面をかぶったスパイ」と非難されたのである。村田陽一編訳『コミンテルン資料集』前掲、資料四二、二四〇頁。

(8) S・ペインも同じ見解である。「コミンテルンは……対内的に共産主義者の主導権が強まれば強まるほど、対外的には共和制政府が見かけは穏健になるように努めた。」ペイン、前掲書、二一八頁。

(9) この秘密報告の抜粋が、本書の巻末に付録として収められている。それらは三七年七月八日、八月三〇日、九月一五日、三九年三月一二日、三月二一日付けの五通である。

(10) ボルケナウは同じことをより直截に述べている。共産主義者の影響力は、「諸組織の併合政策」と「フェビアン主義的浸透政策」によって行使されたのであって、「支配的組織を通じてでも有力な個性を通じてでもない。」つまり「今日の（三七年初め――評者）共産主義者の影響力の増大は、運動が政治的要素から軍事的要素へと、また社会的要素から組織的要素へと変貌していく徴候である。共産主義者に力を与え、かれらを間接的に政治的な支配勢力たらしめたものは、軍事的組織的影響力であって政治的影響力ではない。」Franz Borkenau, *The Spanish Cockpit*, University of Michigan Press, © 1937, rpt., 1974, pp. 192-193.

(11) トリアッティは第二次大戦後、次のように触れている。「プロレタリアート独裁でない権力に共産党が参加することも認められ、正しいものとされ、奨励された。……共産党員は、ファシズムを絶滅し、民主主義を救うために権力に参加することを望んだ。」パルミーロ・トリアッティ「共産主義インターナショナルの歴史にかんするいくつかの問題」（一九五五年）『トリアッティ選集3』（合同出版、一九六八年）所収、一六一頁。

(12) H. Thomas, *op. cit.*, p. 932. ヒュー・トーマス「スペイン戦争をめぐる政治状況」フィリップ・トインビー編『回想のスペイン戦争』大西洋三その他訳（彩光社、一九八〇年）所収、二〇～一、二九頁。

(13) 以上の引用はすべて、斉藤孝「一九三〇年代とスペイン内戦」斉藤孝編『スペイン内戦の研究』（中央公論社、一九七八年）所収、六一～二頁。

(14) つとにボルケナウは「スペインの諸事件の正しい理解は、おおいにアナキズムの正しい理解に依存する」ことを述べ（F. Borkenau, *The Spanish Cockpit*, p. 18.）、ブレナンはアナルキスタとカルリスタの間に類似の集合心性があることを指摘している（Gerald Brenan, *The Spanish Labyrinth*, 1943. 鈴木孝訳『スペインの迷路』合同出版、一九六七年、第七～九章）。

(15) プリモ・デ・リベーラの独裁の間、ＰＣＥはとるにたりぬ存

在であったがゆえに、政府はPCEの機関紙『労働者の世界』を弾圧する必要すらなかった(ブレナン、前掲書、二七八頁)。トリアッティすら一九三六年に「スペイン労働者階級は、一九三一年の王制打倒まで、真の大衆的な共産党をもっていなかった」ことを認めている(トリアッティ「スペイン革命の特殊性」『統一戦線の諸問題』山崎功訳、大月書店、一九七五年、五〇頁)。また党史は、第二共和政の初期には八〇〇人程度の党員しかいなかったと述べている(*Historia del Partido Comunista de España*, 1960. 邦訳『スペイン人民戦線史』新日本出版社、一九七〇年、一三頁。なお邦訳は党史の第二章と第三章のみの翻訳である)。もっともボルケナウの「内戦の初めの六週間の間、共産主義者の影響はとるにたりない」という指摘は、過小評価であろう(F. Borkenau, *European Communisim*, New York 1953, p. 165.)。

(16) S・ペイン、前掲書、一三〇頁。

(17) ボルケナウも述べるように、「中央集権と規律は、尖鋭な危機のときには最も必要とされる近代生活の要素」であり、共産党はこの必要を満たしたのである。Borkenau, *The Spanish Cockpit*, p. 291.

(18) *Ibid.*, p. 179. スペインの先進地域であるカタルーニャは、この面でも中央レヴェルの政治状況に先んじていた。三六年七月から三七年五月に至るカタルーニャの社会革命の進展と緊張の増大については、Burnett Bolloten, *The Spanish Revolution : The Left and the Struggle for Power during the Civil War* (Chapel Hill, 1979), pp. 368-402. が詳しい。

(19) Paul Preston, "War of Words : The Spanish Civil War and the Historians", in Preston ed., *Revolution and War in Spain 1931-1939* (London, 1984), p. 5, p. 9. なお邦語文献で研究動向を概観したものとして、若松隆「スペイン内戦史研究の現段階」斉藤孝編『スペイン内戦の研究』前掲。

(20) Bolloten, *op. cit.* なお本書は一九六一年にThe Grand Camouflageと題して出版された著書の改訂版である。三七年五月以降については簡略ではあるが、Bolloten, "The Parties of the Left and the Civil War", in Raymond Carr ed., *The Republic and the Civil War in Spain* (London, 1971), pp. 146-155.

(21) 脱出についてのトリアッティ自身の発言は、マルチェラ・フェルラーラ、マウリッィオ・フェルラーラ(石堂、上杉訳)『トリアッティとの対話』下巻(三一書房、一九六一年)九六～九頁。

(22) Bolloten, *The Spanish Revolution*, p. 133.

(23) トリアッティ「スペインの経験」(一九四五年)『トリアッティ選集1』(合同出版、一九六六年)所収、二五八～九頁。

(24) 党史『スペイン人民戦線史』前掲、一六八～九頁。「民主共和国の防衛」というPCEのスローガンへの辛辣な批判は、Borkenau, *The Spanish Cockpit*, pp. 193-194. 党史以外でPCEの見解を示す邦語訳文献として、Dolores Ibárruri ed., *Guerra y Revolución en España 1936-1939* (Moscú, 1971), 4 vols. 秋山・石井・藤江訳『スペインにおける戦争と革命一九三六―一九三九』青木書店、一九七三年)。邦訳は全四巻の予定であるが、今日まで二巻しか刊行されていない。